

第2部

SDGs時代のライフスタイルと持続可能な地域づくり

基調講演

谷口正和さん

マーケティングコンサルタント/
 (株)ジャパン ライフデザインシステムズ 代表取締役社長



サスティナブル&サバイバルの時代に

世界は大きな変革の時代を迎え、我々は一番大切なものが何かを問いかけられています。地球の共通共感言語となるのがサステナビリティです。他者と比較して標準を目指すのではなく、一人ひとりが個性的に、自分らしく生きるのがその一歩となります。また、こうした変革の時代を生き延びる、つまりサバイバルしていくのはあなた自身です。命の主人公は、あなた自身であり、誰かのせいにはできません。

「非日常」が持つ魅力はありますが、日常の連鎖の中に非日常が入り込むのです。日常・非日常を小分けせず、むしろ日々の中に幸福を感じられるか。日常や地域社会の中心になるのは一人ひとりであり、自分の興味を深掘りすること、期待に応えようとする、相互に活かし合うこと、こういった日常のなかでの営みが重要になります。世界有数の長寿国である日本は、長く生きる身体づくりだけではなく、他者に貢献しながら幸福感を得られる暮らしづくりをさらに探求し、リードしていくべきです。

今こそ一人ひとりの気づきを深めるチャンス。大きく転換するための重要な局面にいます。一人ひとりが変わっていくことで、社会全体が変わっていきます。あの革命があったから、次の社会へのステージへ行くことができたと思える日がやってくるはずでしょう。

パネルディスカッション

ライフイノベーションNAGANO

<パネリスト>



谷口正和さん

マーケティングコンサルタント/
 (株)ジャパン ライフデザインシステムズ 代表取締役社長



牛窪 恵さん

世代・トレンド評論家/(有)インフィニティ代表取締役/
 立教大学大学院ビジネスデザイン 研究科 客員教授



青木寛和さん

古着屋TRIANGLE



東野唯史さん

(株)ReBuilding Center JAPAN
 代表取締役



山村まゆさん

長野県農ある暮らし相談センター
 農業アドバイザー



藻谷ゆかりさん

地方移住コンサルタント
 /巴創業塾主宰

<コーディネーター>

大きな変革の時代を迎え、いかにして私たちは自分らしく、サステナブルな人生を送っていくことができるでしょうか。自然豊かな信州において、環境と調和しながら創意工夫の知恵を出し、持続可能な社会に向けて日々実践する3名のライフスタイルを手掛かりとして、これからの時代の生き方、暮らし方を考えるパネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッション

青木 「TRIANGLE」は一般的な古着屋とは違い、すべての服を寄付で賄っています。これまで約2,000着の古着を寄付していただきました。モノが非常に余っていることを実感しています。大げさかもしれませんが、自分たちが古着を集めれば集めるほど、世界はちょっとずつ良くなっていくのではないかと思います。服を捨てずに誰かへ引き継ぐのがスタンダードな世界を目指していきたいです。日常の中で出来ることが連鎖すれば大きな動きになるように、この取組がより良い世界に繋がる一歩になればと思います。

山村 私は東京生まれですが、幼い頃から植物が好きで、いずれは母の生まれた信州で暮らしたいと心に決めていました。2007年に塩尻に移住し、念願だった家庭菜園や庭作りをして、非常に充実した日々を過ごしています。料理中に薬味が足りないから畑へ採りに行こうだとか、完熟トマトがどっさり採れたのでトマトソースを作って保存しようとか、買ってくるよりも自分で作るというようなクリエイティブな日常を楽しんでいます。楽しく美しい生活を営むことを、子どもにも周りの人にも伝えていきたいです。

東野 2016年に「ReBuilding Center JAPAN」を立ち上げました。空き家などから古材や古道具を買い取り、これらを使った家具づくりやリノベーションを手掛けています。日本は空き家率が高く、解体された空き家から138万5千トンの産業廃棄物が出る一方で、海外の古材をわざわざCO2を排出してまで輸入しています。こうしたことに矛盾を感じたのが、事業を始めた理由です。古材を活用すれば家主さんの思いを引き継げることはもちろん、森林を守り、雇用を生み出せる。みんなが幸せになれるのではないかと思います、取り組んでいます。

牛窪 2008年に「草食系男子」という本を書いた頃から、若者は高度成長期・バブル期と続いた日本経済の流れにNOを突きつけるようになっていました。「もう競争するような生き方はしたくない」と。同時に、モノを購入する際には廃棄するときのことまで考えたり、自分で手作りをすることの喜びを感じていました。お三方のように、自ら気づいて実践する方々が増えていくと、若者もやっぱりこういう生き方をすればいいんだという大きな気づきになると思いますし、上の世代もそのような流れに突き動かされ、変わらないといけないことを強く感じるのだらうと思います。

藻谷 四季折々、常に自然と対峙していかなければならない信州での暮らしですが、衣食住の面で創意工夫をしながら楽しい生活を送れると思います。今日聞いていただいた皆様に私どもの信州での暮らしがお役に立てば幸いです。



阿部守一
長野県知事



谷口正和さん
マーケティングコンサルタント/
(株)ジャパン ライフデザイン
システムズ 代表取締役社長

谷口 長野県は新しい生き方や暮らし方の参考事例にあふれていて、期待が大きいですね。

阿部 基調講演とパネルディスカッションの話題でいくつか共通点があるように思いました。まずは「日常の中の非日常」、日々の暮らしの中に新しい価値を見出していること。次に「自立した暮らし」、他者に依存しなくてもできることを増やすこと。こうした点がこれからのライフスタイルにとって非常に重要なポイントではないかと考えています。

谷口 地球の恩恵を受けながらいかに継続できるかというサステナビリティの観点において、山村さんの「農ある暮らし」のように、創意工夫をしながら自然と共生していくライフスタイルこそがこれから注目されると思います。新しい価値観の流れを是非促進していただきたいです。

阿部 便利か不便かという話がありますが、実は不便さの中に楽しみがあったり、あるいは不便さの中にクリエイティビティを活かせる道があったりするのではないかと思います。自宅で薪ストーブを使っているのですが、寒い日でも外から薪を運ぶ必要がありますし、最初は火がつかなくてひと苦労です。一見不便ですが、電化製品では得られない驚きとか楽しみがあるのです。今、私たちの価値観の変化が求められていると感じます。単なる物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさを感じられる地域社会を是非長野県から作り上げていきたいです。

谷口 パンデミックによって従来の常識が覆され、ゼロベースで考えなくてはならない状況になりました。当たり前だった日常が当たり前ではなくなってしまったのではないかと、と問いかけられたことで、一人ひとりが生命力を持つことの重要性に気づいた人が急速に増えた気がします。近代化の中で見落とされたのが自然との関係です。しかし我々は自然から恩恵を受けて暮らしているに過ぎない。自然との共生を楽しみに変えていくような本質への問い直し、あるいは本質への回帰が起きるのではないのでしょうか。

阿部 新型コロナウイルス感染症や気候変動は、規模が大きすぎる課題に思われるかもしれませんが、解決していくには私たち一人ひとりの行動変容が欠かせません。むしろグローバルな課題は、実は一人ひとりのライフスタイルが大きく影響しているとも言えます。ライフスタイルをどう変えていくかがまさに問われていると思います。